

## 「会員寄稿」

### 本学卒業生・高橋睦郎氏の文化勲章受章を祝して

久保 田 裕 子

#### 一 高橋睦郎氏の略歴と業績

福岡学芸大学（現・福岡教育大学）教育学部国語国文学科の卒業生である高橋睦郎氏（一九三七・一二・一五）が、二〇二四年度文化勲章を受章された。高橋氏は詩人、俳人、歌人であると同時に、ギリシャ悲劇の演劇化などの演劇の分野にも活動を広げ、また日本文学史についても詩の領域から読み直す独自の評論活動が続けて来られた。この場を借りて本学の卒業生である高橋氏が達成されたためみない文学活動の成果に対し、本学国語科の関係者のひとりとしてお祝いを申し上げると共に、ご経歴と業績について記しておきたい。

高橋氏は福岡県八幡市（現・北九州市八幡東区）生まれ、北九州市立柳西中学校を卒業するが、在学中は新聞配達で学資を得て、福岡県立門司東高等学校時代は日本育英会奨学金を受けるなどの苦学の時代が続いた。

一九五六（昭和三一）年に福岡教育大学の前身である福岡学芸大学に進学後、一九五九（昭和三四）年に第一詩集『ミノ・あたしの雄牛』（一九五九・一一 沙漠詩人集団事務局）を自費出版するが、大学時代は病氣療養の時期を過ごす。その間も筑摩世界文学大系の『ギリシャ・ローマ古典劇集』や人文書院の『ギリシャ悲劇全集』を通読し、卒業論文にはギリシャ悲劇を取り上げており、古典の現代文学化という後の文学活動の萌芽がこの時期から見られる。一九六二（昭和三七）年に大学を二年遅れで卒業。『詩学』誌上での川崎洋の賞賛もあつて上京を決意、安西均との関係で日本デザインセンターに入社する。ここで横尾忠則や宇野亜喜良と出会い、一九六四（昭和三九）年、宇野亜喜良装幀、谷川俊太郎跋文で『薔薇の木・にせの恋人たち』（一九六四・九 現代詩工房）を刊行した。それを讀んだ三島由紀夫から電話を受けて交友が始まり、第三詩集『眠りと犯しと落下と』（一九六五・六 草月アートセンター）に

三島は跋文を寄せた。その後、稲垣足穂や澁澤龍彦の知遇を得る。一九六六（昭和四一）年に広告製作会社サン・アドに移り一八年間勤務する。

一九八二（昭和五七）年に『王国の構造』（一九八二・二小沢書店）で第二〇回藤村記念歴程賞受賞、一九八八（昭和六三）年に『兎の庭』（一九八七・九 書肆山田）で高見順賞受賞、一九九三（平成五）年に『旅の絵』（一九九二・一〇 書肆山田）で現代詩花椿賞、二〇〇〇（平成一二）年度紫綬褒章、二〇一〇（平成二二）年に『永遠まで』（二〇〇九・七 思潮社）で現代詩人賞を受賞。二〇一五（平成二七）年に現代俳句への寄与が評価されて現代俳句大賞受賞。二〇一七（平成二九）年に文化功労者、日本芸術院会員となり、今回の文化勲章の受章に至った。

## 二 高橋睦郎氏の詩の世界

高橋氏の詩の源泉は、古代ギリシャ・ラテン文学、キリスト教神学、ボルヘスやダンテ、日本の古代神話、和歌や漢詩文、謡曲、能、等多岐にわたり、日本やヨーロッパの古典文学の世界を現代詩へと導入し、時間や国境を越えたジャンルを横断する表現活動へと結びついていった。

四方田犬彦は、高橋氏の詩業について、次のように述べている。

かつて20歳代の終りごろ、高橋睦郎はノオトに書き記した。王子は王子の門を通過して天国に行くだろうし、乞食は乞食の間を通過して天国へ行くだろう、と。では、詩人はどの門を通過して、どこに到達するのか。

詩、短歌、俳句、アフォリズム、そして詩劇。この狷介にして寛容なボエジーの徒は、およそ日本語の内部で考えられるかぎりの詩的ジャンルを涉獵し、なお飽きることを知らない。高橋睦郎はどこまでもさすらい続ける。しかし、なぜ？ それは彼が『動詞』のなかに書きつけた予言を成就するためである。すなわち、人がさすらうのは、かつて神がさすらったからだという。（続・高橋睦郎詩集『現代詩文庫135 一九九五・

一二）

四方田は高橋氏の創造の世界が日本語のあらゆる詩的ジャンルを横断しつつ、神話的な世界を描出している点を指摘しているが、創作活動の中に神話の中の流竄の王子のイメージを見出している。

一九九六（平成八）年に宗像神話に基づく家族史を試みた『姉の島』（一九九五・八 集英社）で詩歌文学館賞、読売文学賞受賞の句歌集『稽古飲食』（一九八八・二 不識書院）、蛇笏賞受賞の『十年』（二〇一六・九 KADOKAWA）がある。時代や場所を越境する文学活動は、従来の文学史を再考する姿勢へと結びついていき、評論『読みなおし日

本文学史』(一九八八・三 岩波書店)、『詩心二千年——スサノヲから三・一一一』(二〇一一・一二 岩波書店)等がある。

このような高橋氏の浩瀚な文学活動は、同時代の文学や文化における人間関係を通して醸成されていった。高橋氏の文学はギリシヤ的な普遍的・神話的世界を描きながら、一方で一九六〇～八〇年代のサブカルチャーと呼ばれた文化領域の最前線で活躍し、新しい時代を作った人々との交流の渦中にいたことも、日本の戦後文学、戦後の文化史を語る上で見逃せない。例えば高橋氏の発見者の一人であった三島由紀夫もまた、六〇年代のサブカルチャーの擁護者、発見者として君臨していたが、当時は現在以上に純文学／大衆文学、あるいは中央／地方というような文化内における序列が存在し、自由であるはずの文学の世界ですら、学歴や年齢についての制限も多かった。その中で「まだ誰でもない若者」たちが、自分たち独自の表現を追求していたが、高橋氏もその一人であり、谷川俊太郎、瀧澤龍彦らの文学、横尾忠則、宇野重吉良などの美術、舞踏家の土方巽といった人々が続いた。

高橋氏は小説も書いており、『十二の遠景』(一九七〇・七 中央公論社)において、驚くべき記憶力で当時の製鉄の町、北九州の場所や身近な人々を再現している。



【図1】『十二の遠景』

記憶の中のいま一つの夕焼けの構図では、堤の代りに海峡が、山山谷の代りに八幡の山影が、そして寒竹鉄工所のある対岸の代りに彦島の島影がある。夕焼けは八幡の山影の空からはじまり、八幡の先、若松のあたりで切れた山影から、海の上を通って、彦島の空に拡がってくる。(『十二の遠景』)

このように日常の風景をあたかも神話の一場面のように描出する一方で、「旧街道に面したその暗い家」の門司の家の中の描写では、次第に貧しさの度合いが高まっていくような不穏な描写の中に、過去の記憶へと没入する情感を漂わせている。

荷馬車の響きに一日揺れ通しの緑側の摺硝子戸、摺

硝子の内側の、桜づくりの私の勉強机のあるやや明るい四畳半。さらに奥のご飯食べ場に当ってた暗い四畳半。仏壇のある押込。ひらかし麦の罐や米の甕にまじって、唐芋が囲ってあったりする、ひんやりつめたい板張り。一枚だけ硝子が割れて紙が貼られている玄關の戸。玄關から炊事場までの細長い通路。竈。中庭にある便所。炊き口のこわれた風呂。墓の匂いのする倉庫。(十二の遠景)

少年時代の暗い貧しさの中で、日常の細部に繊細なまなざしをそそぎつつ、神話的な世界へと没入する想像力の原型が見られる。北九州という地域の記憶という面でも、高橋氏の文学が果たした役割は大きい。さらに同時代の作家や創作を志す若者たちとの交流を記した『友達の作り方』(一九九三・九 マガジンハウス)、三島との交流を収めた『在りし、在らまほしかりし三島由紀夫』(二〇一六・一一 平凡社)などは、戦後のカウンターカルチャーの生きた歴史の証言でもある。

### 三 福岡学芸大学時代の高橋氏の想い出と 戦後文学における若者の時代

高橋氏から私が直接伺った大学時代などの記憶について記しておきたい。筆者の記憶に基づく内容であり、誤りが

あればその責任は筆者にあることをお断りしておく。

高橋氏は健康上の問題や、経済的な困難を抱えていた大学時代のことは余り語っていないが、当時の国語科では、成績が一番の学生を基準とした点数でないで単位を取得できないという授業があり、高橋氏が成績評価のハードルを上げすぎて同級生が困ったらしい。

当時は健康上の制限などがあると、教員になったり公務員になったりする進路は困難という状況もあったという。卒業後は「ほとんど無賃乗車に近いような状態で」上京したという高橋氏は、三島由紀夫から初めて職場に電話をもたらったとき、「三島です」と言われても誰のことかわからなかったという。当時は既に有名作家であった三島はほぼ無名の若者だった高橋氏の詩集に序文を書くとし申し出るが、「君は菓子折ひとつ持ってきてはいけないよ」と諭した。天才、鬼才と持て囃されていた三島が人間関係の上では常識人であり、きめ細かな配慮を持っていたことを示す、知己ならではのエピソードである。一人の若者が、さまざまな人々との出会いを通じて文学を育ててきたためみない活動の成果が、二〇一七年には文化功労者、日本芸術院会員への推挽となり、今回の文化勲章の受章として結実した。

最後に私的な記憶を記すことをお許し頂きたい。私が高橋氏の本に最初に出会ったのは、小学校三年生の時に読んだ『愛のギリシャ神話』(一九七三・一 新書館)であっ

た。一九六五年一〇月初刊で、手元にある本を確認すると、一九七三年版は五刷になり、よく売れたことをうかがわせるが、現在は国会図書館や他の図書館にも所蔵されていない本である。東京の下町にある中央区月島の西仲商店街の相田書店で手に入れた、生まれて初めて買った詩集だった。相田書店は最近まで営業を続けていたが、一九七〇年代当時には、町の小さな書店でも少発行数の文学書の扱いがあったのだ。



【図2】『愛のギリシャ神話』

『愛のギリシャ神話』は、ギリシャ神話を日本語の現代詩にして写真を添えた詩集であるが、詩という文字テキスト

と写真という視覚表象をあわせて表現しており、異メディア間移植となるアダプテーションとしての表現の試みであったと言えるが、その先鋭的な感覚には今日から見ても驚くべきものがある。「イメージ・ディレクト&デザイン」は宇野亜喜良、写真は沢渡朔、モデルのヘア・デザインは伊藤五郎と記されており、二〇代から三〇代前半の、後に時代を代表するような各分野におけるそうそうたるメンバーが参加していた。友達同士で面白がつてのびのび作ってみたというような手作り感覚もある楽しい本であるが、普遍的なギリシャ神話に載せて、当時の若者たちの創造のエネルギーが横溢し、その中心点に高橋氏がいたことがわかる。本書は■本人がギリシャ悲劇を読み替えて日本語で表現し、演じるという大胆な試みであるが、ちなみに三島由紀夫が『サド侯爵夫人』（一九六五・一一 河出書房新社）において、フランス革命期を日本語で描き、日本人俳優にフランス人を演じさせた大胆な試みとほぼ同時期である。このような想像力を駆使し、時間や場所を超越した高橋氏の詩業が持ち続けた大胆不敵な横断的表現は、その後の『読みなおし日本文学史』（一九八八・三 岩波書店）における文学史の読み替え、宗像という地域の神話を通して家族史を神話的な世界へと昇華させた『姉の島』などにも継承されていく。高橋氏の詩の世界には、流謫の王子の永遠の若さというイメージがあり、若者の挑戦という形で始まった想

像力の旅は続いている。

ところで三島由紀夫をめぐる一九五〇、六〇年代の文化的記憶の再検証の場となった二〇一五年一月の東京大学駒場キャンパスにおける国際三島由紀夫シンポジウムにおいて、高橋氏には「在りし、在らまほしかりし三島由紀夫」(井上隆史・久保田裕子・田尻芳樹・福田大輔・山中剛史編『混沌と抗戦——三島由紀夫と日本、そして世界』(二〇一六・一一 水声社)というタイトルで講演して頂き、若い異能の才能が集った交流の現場についての記憶を伺った。このときには三島と90番教室で対峙した東大全共闘の一人である劇作家の芥正彦氏、写真集『薔薇刑』の写真家細江英公氏、もう一人の文化勲章受章者であるドナルド・キーン氏なども登壇されて、三島の同時代の文化的雰囲気伝えて下さり、若者たちが果敢に自己表現へと向かった一九六〇年代という時代の雰囲気的一端を知ることができた。このときには東筑高校出身の芥川賞受賞作家である平野啓一郎氏も登壇されたが、平野氏は筆者に、「小中学校で教えて頂いた先生には福岡教育大学出身の方がおられて、懐かしいですよ。」という思い出を語って下さった。

このシンポジウムには本学の大学院教育学専攻国語教育領域(当時)の大学院生三名も会場の運営に参加してもらい、大学の先輩である高橋氏の言葉を直接伺う機会となった。現在は三名とも中学校、高等学校教員として活躍され

ているが、高橋氏が文学的記憶を伝える場に学生が加わり、本学をめぐる文化の継承にささやかながら参与したことを最後に記しておきたい。

### 参考文献

- 高橋睦郎『愛のギリシャ神話』(一九七三・一 新書館)
- 高橋睦郎『十二の遠景』(一九七〇・七 中央公論社)
- 高橋睦郎『友達の作り方』(一九九三・九 マガジンハウス)
- 高橋睦郎『在りし、在らまほしかりし三島由紀夫』(二〇一六・一一 平凡社)
- 井上隆史・久保田裕子・田尻芳樹・福田大輔・山中剛史編『混沌と抗戦——三島由紀夫と日本、そして世界』(二〇一六・一一 水声社)
- 『増補改訂デジタル版日本近代文学大事典』「高橋睦郎」大塚常樹([https://japanknowledge.com/20\\_241207](https://japanknowledge.com/20_241207) 最終閲覧)

(くばた・ゆうこ 本学教授)